＊＊＊＊＊＊あなたの町の情報誌＊＊＊＊＊＊

住まいル新聞

日本ステンレス工業株式会社
発行/日本ステンレス工業株式会社
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1
電話=0554-22-2500
FAX=0554-22-5234
Vol.134 2010 11月号

大月人物伝　戦場をかけめぐった従軍記者　小俣　行男

小俣行男のぶ厚い報道記録「戦場と記者」は、日中戦争と太平洋戦争に従軍した八年間の記録である。それは昭和十三年一月十三日、読売新聞特派員として上海に上陸した時から始まる。二十六歳であった。

緒戦

敵の銃声は前からも、横からも後ろからも聞こえてくる。私たちは包囲されているらしい。見方はどこにもぐったのか、一発も銃声が聞こえない。そのうちに、後の銃声が次第に接近してくるような気がした。このまま麦畑にもぐっていれば捕まってしまう。前方を見たら味方の兵が麦畑のあいだを前進しているのが見えた。すばやく前進し、さっと麦畑の中に姿を消す。するとそのあたりに敵弾が集中し麦の葉が散った。一歩駆けだして伏すと頭の上をピューと敵弾がかすめて行く。これが敵弾をまともに浴びた最初の経験だった。

ついで、揚子江の中流、九江を拠点として漢江の攻略が始まった。行男は軍艦安宅に乗って取材活動をした。

安宅のデッキで暗い水面を眺めながら、今度は生きて帰れないかも知れない。今まで何回か危険な戦線を歩いてきた。そのときはただ夢中で歩いた生きぬいて原稿を書こうと思ってしかし今歩きつづけた。

度は違った。いよいよ敵前上陸だという。若い不安があった。

真っ暗だった。

の人生の最後の日が近づいているような気がした。

ヒゲを剃り終えると、便箋を出して父母に手紙を書いた。

いよいよ敵前上陸だという文字は書くわけにはいかない。けれどもそれとなく別れの言葉を書いた。親孝行というようなことをしたことはなかったが、こんど帰ったら、ゆっくりお父さんと旅行がしてみたいというようなことも書いた。

ところで、この安宅には日本最初の試みの「従軍文士」の一行が乗り込んでいた。菊地寛、佐藤春夫、小島政二郎、吉川英治、北村小松、吉屋信子、浜本浩などという顔ぶれだった。以後、行男は従軍中の取材を通して、著名な作家や学者と交流した。作家では高見順ともっとも親しくし、珍しくは当時良心的な学者として名の高かった清水幾太郎とも戦線で顔を会わせていた。

背水の陣

ある土手の斜面に寄り添って小休止した。出発して二、三分たったとき、さっき休んでいたところに続けざまに三発、砲弾が落下して土砂を高く噴き上げた。出発遅れていたら行男も、津田部隊長（百四十九連隊）も、みんな滅茶々々にやられてしまったろう。行男は、二、三十メートル横に次々炸裂する敵の弾着を眺めながら、思わず胸を押さえた。

戦場では生と死が紙一重だ。運が悪ければ忽ち敵弾にふき飛ばされてしまう。今は生きている。しかし次の瞬間、敵の砲弾でやられてしまうかもしれない。しかし生きている限り、従軍を続けて、前線の状況を内地へ送り続けようと思った。

前線へは、ときどき、郷里から月見草の種が送られてきた。笛吹川や相模川のほとりに咲いた月見草の種を小学校や女学校の生徒たちが摘んで、慰問袋の中に入れて前線に送ってきた。月見草の咲く季節といっただけで、兵隊たちは、川原や土手で楽しく語り合った村の娘たちの姿を思い浮かべた。

昔、笛吹川のほとりで月見草祭りが行われたことがあったという。若い人たちにとっては楽しい夜祭りだったが、「風俗をみだす」という理由で禁止された。「だけどあの頃は楽しかったなアー」遠い昔の故郷を想い出して、そんなことをいう兵隊もいた。

次ページへ続く

大月人物伝 歴史探訪

戦場をかけめぐった従軍記者　小俣　行男

懐かしいふるさとの想い出を秘めた月見草の種が雑嚢の中や、軍服の物入れの中に入れられ、つぎつぎに部下や戦友の戦死の地に蒔かれて行った。廬山は日本と同じように松もある。清らかな水もある。雑草のような月見草のことだから、恐らく芽をふき、花を咲かせたのではなかろうか。

シンガポール攻略戦

昭和十七年一月、サイゴンからタイの国境を越えてバンコクに入った。私は草むらの間のくぼみを見つけてそこに飛び込み、頭から毛布をすっぽりかむった。懐中電灯をつけ原稿を書き出した。蒸し暑い、二、三分たつと息が苦しくなる。

懐中電灯を消して毛布から顔を出して息をする。また毛布をかむる。そんなことを繰り返して原稿を書いた。原稿を送ってスクダイ河畔へ降りた。河の上を蛍がスースーと飛んでいた。

あの蛍のように、私たちの生命もパッと燃えてスーッと消えて行くのかも知れない。人生は瞬間的なものだ。あとに暗い闇だけが残される。しかし、たとえ瞬間的な光であっても、燃えるときは蛍火のように美しく、華やかに光って燃えてみたい。従軍記者の運命もこの蛍のようなものだろう。瞬間、それこそほんの瞬間だったがふと私はそんなことを考えた。

そして二月十二日、行男にとって生涯忘れることのできない日がやってきた。敵の集中砲弾を浴び、九死に一生を得た日だった。

身体を伏せるのと、すぐ近くに砲弾が落ちる時だった。一緒に伏せた筈の柳君は砲弾の破片で戦死した。二時間休みなく、同じ場所を集中してきた。緑が赤い土肌に変わってしまった。私が飛び込んだ小さなくぼみの周囲に七、八発の砲弾が落ちた。一番近いのは一メートル殴りつけられたような衝撃を受け、頭から土をかぶってなかば気を失った。

このときの手記は読売新聞の社会面を埋め、大きな反響を呼んだ。顔写真入りで「血で描く前進の記録」「シンガポール市西北角の白兵戦」とし、トップのタテ見出しは「生温い爆風を全身に」〝あっ僕は生きていた生きていた〟（派員手記）となっていた。

ビルマ戦線

ビルマに来たものは一度はかかるという病気にテング熱があった。突然発熱し、たちまち四十度の熱になる。行男は、私一人だけは大丈夫だと思っていたのだが、最後にデング熱になった。最初の三、四日は熱にうなされて意識不明になった。熱が下がったとき、故郷の夢をみた。母や妹の夢をみて、ビルマにきてはじめて泣いた。

南方戦線へ来てから行男は生死を考えなかった。ただ他の新聞には負けてはならぬと思って働いた。報道戦に勝つことだけを考えてきた。生きて内地へ帰ろうと思ったこともなかった。熱が下がって、全身の力が抜けて骨がバラバラになったように感じたとき、急に故郷のことを思い出した。もう一度母に会いたい。

「ただいま」といって帰ったら、母はどんなに喜ぶだろうか。行男は病気では死にたくない。「生きてお母さんに会いたい」としみじみ思った。

そんなとき、東京から電報がきた。「母危篤」だった。武漢作戦中に父が死んで、その死に目に会えなかった。今度は母が危篤だが、ビルマ作戦は一段落となっていたので、東京に帰るよう編集局から指令があった。しかし、何千キロも離れた南方のビルマからの帰郷である。マレー半島を北上してタイの国境へ、カンボジアからサイゴンへ、サイゴンからは飛行機で台北へ、そして上海、長崎へと着いた。しかし、母はすでに死去していた。全身の力が抜けて立ちすくんでしまった。

先祖の墓地は、行男が生まれた賑岡町小和田、禅宗の寺の裏山にあった。何百年も経った赤松の巨木につたがからまっていた。墓前にぬかずいたとき、はじめて、こらえていた涙が一度にあふれてきた。

行男は、戦後読売新聞社を退社、埼玉新聞社編集局長、同社専務を経て退社、大正製薬総務部長等を歴任した。

資料提供　親族　小俣一起

執筆者　井上　豊